

(写真 IMG 0890)

「まったく、だらしねえな！いつまでよだれを垂らして寝穢たなく眠りこけてるんだ！着いたよ、ルンビニに」という山田先生の罵りを目ざましに車から降りた。

ルンビニ！仏陀（ゴータマ・シッダルタ）生誕の地にやってきた。真言宗大徳寺派の信徒として万感の思いに心が震える……と思って期待していた。然しだ、心が震えるどころか琴線に触れてくるものが何もない！初めて竜安寺や日光東照宮を訪れた時は、静謐な気というか心の琴線に触れる感動があった…。一体どうしたというのだ、これは！まだ、目覚めていないのか？ それとも齢を重ねすぎて無関心に…いや、私にはもともと信仰心なんてものは無かったのか？ 何となくザラついた思いを抱きながらルンビニの門をくぐった。

「なに、このチンケな金キラ小憎！これが、お釈迦様あ〜」誰かが、つい口に出したとたん、「心に思ったことを何にも考えずに口に出すのは君たち庶民の大いなる過ちである！改めよ！と言ってもいまさら変わるわけもないか。いま日本では、忖度って言葉が世間を騒がせているのを知らないのか？ 全く思い遣り感性のかけらもない奴らだ。」と山田先生の叱声が飛んだ。「おい！ツバコと止まり木」と手のひらをひらひらさせて森女史と梶女子を手招いている。「何だ？ツバコに止まり木って」そばにいた近藤さんが聞いてきたが答えられない。3人で、何やらごちゃごちゃと話し合っている。時折山田先生の笑い声や女子二人の甲高い楽しそうな声が聞こえてくる。どうやら山田先生はこのふたりが気に入っているようだ。

「君らに二つ名をつけてあげよう。君は頭の回転が素晴らしく速いが燕の赤ちゃんみたいによく啼くからツバ子でいいだろう。そして君は大変しっかりしているからツバ子が頼りにする止り木としよう。」ツバ子と名付けられたのは森女史、止り木は梶女史である。「我ながらうまいあだ名を思い付いたものだ。うん」…ひとしきり自分に感心しながら3人で掛け合いをしていた…。そして、像を見上げて「しかし、この像は改めて見るまでもなく君たちの見方に一理あることは確かだな……。」意外と軽い山田先生である。自動小銃を肩にかけたネパールの兵士が、やさしいまなざしでこちらを見ている。インドの兵士はほとんどみんな態度が大柄であるのに比べ、ネパールの兵士は、精悍さを失わぬ風貌の中に穏やかな面差しを保っている。着用している戦闘服の色も違っている。インドはくすんだ草色の迷彩服であるがネパールは空色の迷彩服である。常時、戦時下にある国と無い国との違いなのかな…。

お釈迦さまが生まれた場所は、白亜の大理石造りの建物の中にあつた。この建物はマヤヴデヴィ堂と呼ばれ、アショカ王柱、そしてマーヤー夫人が出産前に沐浴したという聖なる池のすぐ近くにある。聖なる庭園の入口で靴を脱ぎ、靴を預けて中に入った。お釈迦さまが生まれ落ちたとされる所では大勢の観光客と信仰心篤い仏教徒たちが入り混じってひしめき合っていた。お釈迦さまが涅槃の世界からこの様子を見ているとしたらどう感じているだろうか？ などと思いながら建物を出てアショカ王柱の立っている裏側へ廻った。やは

り私は仏陀に対する信仰心が希薄なようだ。似非仏教徒なのだろうか？ ガイドが、「紀元前 268 年頃～紀元前 232 年頃に栄えたマウリア朝の第 3 代のアショカ王はインド亜大陸をほぼ統一しました。お釈迦様が亡くなられた後およそ 100 年たって現れたという伝説もあるアショカ王は、古代インドにあって仏教を守護した大王として知られています。この塔はアショカ王が建立したとされる柱です。表面に東部プラークリット語で碑文が刻まれており、ここがブッタの誕生された地であることと、租税を免除することが書かれています。……」長々しい説明が続いている。それから、釈迦が産湯をつかったという池を巡り、お釈迦様のお母さんマヤー夫人が出産前に沐浴したという聖なる池を見て出口へ向かった。池の周りには色とりどりのたくさんの国旗が張り巡らされていた。様々な国の信仰心厚い仏教徒たちが飾っているのだろう。やはり何の感慨も湧いてこない。ガイドがまた説明を始めた。「釈迦は、母親の麻耶夫人がお産のため実家へ里帰りする途中、ルンビニの花園で休んでいた時に夫人の脇の下より姿を現し誕生しました。釈迦はこの世へ出てすぐに七歩歩いて右手で天空を指し左手で大地を指して“天上天下唯我独尊”と声を出したと言います。生後一週間で生母は亡くなり、母の妹、摩訶波闍波提により釈迦は養育されました。ルンビニの地名は多くの文献に記載され実在していた事は確認されていましたが、具体的な位置は長く忘れ去られており、ブッタを伝説上の人物とする可能性も語られていましたが、1896 年にインド考古局のアーロイス・アントン・フィーラーの発掘調査により、ブッタ生誕の地を証明する遺跡が数多く発見されました。まず、仏舎利塔から黄金の舎利容器に入った人骨が発見され、さらにマウリヤ朝第三代王で仏典にも仏教の庇護者としてしばしば名前の記載されるアショカ王が“ブッタがこの地で生誕したのでルンビニ村の租税を軽減する。”と刻ませた石柱が発見され。この地がルンビニであり、釈迦が史実の人物であったことが証明されました。」ガイドは先程と同じ内容の話をつづけて繰り返して説明している。しかし、金キラ小憎を目にしたせいも誰も真剣には聞いていない。私たちの雰囲気を感じ取ったのか、「この庭園の設計者は日本人で、丹下健三という方です。さあ、皆さん！ 預けた靴を間違えないようにして下さいね。庭園を散策してからホテルへ向かいます。」…

「このガイドは侮りがたい奴だな。」と、山田先生がボソッとつぶやいた。

靴を返してもらい、丹下健三氏が設計したという聖なる庭園を散策した。ゴミ一つない庭園は、黄昏の中に沈み始めていた。赤、白、黄色、ピンクと色とりどりの可憐な花がそこかしこに咲き誇っていて心が和んでくる。夕日がきれいだ…！

(池に映った夕日の写真 IMG0908)

池に移った夕日が巖かで、涅槃の世界へ続いているかのような景色である。マヤヴデヴィ堂を背景に全員で記念写真を撮り、外に出る途次、産まれたばかりというキンキラのお釈迦様の像を改めて眺めた。確かに右手で天空を指し、左手は大地を指している。これが、天上天下唯我独尊か、なんとなく感心しながら釈迦生誕の地を後にした。

ルンビニは、ネパールの南部タライ平原にある小さな村である。釈迦の生まれた地とされ、仏教の 4 大聖地のひとつでもある。

門を出て左側に曲がったところで、物乞いをしている子供に出会った。3歳か4歳ぐらいだろうか、きれいに澄んだ円らかな目をそらすことなく見つめてくる。不思議な雰囲気を持った男の子であった。

ホテルに着いた。趣のある木造りのコテージ式のホテルで、芝生が敷きつめられた石畳を渡りながらそれぞれのコテージに荷物を運んで暫く休憩を取り、くつろいだ。バイキング形式の夕食を摂った後、庭に出て皆でキャンプファイアーを楽しんだ。中天にかかる満月が、木々の間から明るい光を射していて、異国の地のせいか、なんとなくロマンティックな気分になってくる。隣に座ってウィスキーを飲んでいた近藤さんが「おい、山本さん！えらいロマンティックな夜だなあ、ところで、インドの女どもの秘所は横向きに着いているって本当かな？」と、周りを憚るように小声で聞いてきた。「そんな話どこから仕入れてきたの？でも、本当だったら興味あるね」と木下氏が口を挟んできた。木下氏は身体も大きい、声も大きい。女性たちの目がこちらに向いている。山田先生はニヤニヤしながら「低俗な奴らとは付き合い切れねえな！高尚な話をととは言わないが、もっとましな話をしな、って言っても無理か、諸兄らには！」と嘲笑いながら、ツバ子さんや止り木さんに話しかけていた。井口氏は、安中さんを労わるように寄り添っている。山田先生の奥様と長田さんは静かに話をしている。火の回りは、和やかな雰囲気に包まれていて何となく救われたような気がした。

「そんなの与太話ですよ。元時代にインドに戦争に行きたがらない戦士どもを奮い立たせるためにそんなことを言ったんじゃない？麻薬やLSDなどのドラッグと同じで兵士を狂わせるものが必要だったんじゃないかな」と小声で近藤さんに答えてビールをお代わりした。小一時間ほどおしゃべりとルンビニの夜を楽しんでからそれぞれのコテージに引き揚げた。

朝5時！荷物を持ってバスに集まった。まだ真っ暗である。ネパールから国境を越え再びインドへ入り、クシナガルからヴァイシャーリーへ向かうのだ。安中翁が「昨夜、木下氏に1時間近くマッサージや指圧をしてもらったおかげで体がとても軽く調子がよい、ありがたいことだ」とうれしそうに話している。

昼過ぎにクシナガルに着いた。ホテルで昼食を摂ったが、なんと！ごはんには味噌汁、漬物に温野菜の日本食であった。みんなホッとしたような顔で食事を楽しんだ。

ここクシナガルは、仏陀が入滅した地とされていて、ルンビニ、ブッダガヤ、サールナートと共に仏教の聖地の一つである。仏陀は、この地で80歳の生涯を閉じた。死に臨んで父母の国ルンビニに頭を向け、2本の沙羅双樹の木の間に横たわり静かに終焉を迎えたという。死に臨む釈迦の姿は、白亜の天堂大涅槃寺の中に安置されている。

(大涅槃寺の外観の写真・IMG0917) (仏陀の涅槃像の写真 IMG0919)

全長6.1mの黄金色に輝く涅槃像は、右手を手枕にして横向きに安置されている。あざやかな橙色の上掛けに包まれており、頭と足首、右手首だけが外に出ている。黄金の釈迦像が安置されている台座には、釈迦の死の原因を招いたと言われる鍛冶屋のチュンダ、最後の弟子バトラ、そしてアーナンダの姿が刻まれている。沢山の信者や観光客で身動きが取れない

中をぬって大涅槃寺を出て、周りに点在する僧院後の遺跡を巡り、広々とした庭園を散策した。巨大な荼毘塚を一回りした時は、途中で休憩を取らなくてはならないほどであった。庭園には、多くの巡礼や敬虔な信者達のグループが大地に座って瞑想にふけていた。休憩のついでに記念写真撮影をしてからクシナガルを後にしてヴァイシャーリへ向かった。ヴァイシャーリへ入るにはガンジス川を越えなければならない。

スモッグの立ち込める先に大河が見えてきた。対岸が見えないのは、スモッグのせいばかりではない。「これが川か！」驚きの声が飛び交った。バスは、ガンジスに架かる橋にさしかかっていた。

我々がガンジスと呼ぶこの川の正式名称は **Ganga**。ヒマラヤ山脈中部に源を発し、インド北部を東西に横断、ベンガル湾に注ぐインド最大の川。全長約 2510km、流域面積 97 万 5900km²。ウッタルプラデーシュ州西部から南西部のカーンプルに出、アラーハーバード付近でジャムナ川、チャブラ付近でガーガラ川と合し、ビハール平原を横断、さらにバングラディッシュに入り、ブラマプトラ川と合流してベンガルのデルタ地帯で網の目状に流れ、ベンガル湾に注ぐ。バングラディッシュ内の下流部はパドマ川と呼ばれる。インドでは聖なる川としてヒンドゥー教徒の沐浴が行われている。川幅は、最大で約 2 km。

1500m ほどの長さの橋の上は、大勢の歩行者や牛馬に曳かせている満載の荷駄を積んだ大八車、けたたましい警笛を鳴らしながら走るバイクやトラックでごった返していた。1.5 kmほどを渡るのに 30 分近くかかった。

「ヴァイシャーリは、ナーランダー、ブッダガヤ、ラージギルなど仏教の聖地が多くあるビハール州に属しています。このビハール州で今年の 6 月から禁酒令がしかれました。これに違反すると最高で終身刑及び 100 万ルピー以下の罰金が科せられます。」ガンジス川を越えたところでガイドのシャルマさんが真剣な口調で説明をし始めた。「この法令は、日本人にも適用されるので気をつけて下さい。飲むことも持ち込むことも所持もダメです。」

「ミスターシャルマ！ ウイスキーを 1 本持っているのだけど、どうすればいい？」

「山本さん、ここはもうビハール州です。飲むことも捨てることもできません！ 見つかる私も刑務所に入れられてしまいます。今夜、ホテルの自分の部屋でひそかに隠れて飲み干してください。決して、部屋から出ないようにして下さいね。山本さんが捕まると私も捕まります。私の方がより罪が重くなります。私には妻と子供がいます。子供はまだで小さいです。私を助けてください。」えらいことになったもんだ。シャルマさんに禁酒法がしかれるようになった理由を尋ねてみた。シャルマさんが言うには、ビハール州の議会は、マフィアのボス達が牛耳っていたらしく汚職が蔓延し、酒の上での刃傷沙汰が日常茶飯事におきていて治安が極めて悪くなっていたらしい。インドの中でも観光客の多いこの地方の評判が悪くなるのを恐れたインド中央政府がマフィアの撲滅を期してその最大の資金源であるアルコール類の製造販売を禁止した…。とのことらしい。「飲んでしまえばいいんじゃない」と木下氏が声を上げた。「みんなで飲めばすぐ無くなるよ」と近藤さんが追従する。「井口さんの部屋に集まってみんなで宴会をしましょう…」と森さんが仕切った。「おいおい、俺が主

犯格かい！」と井口氏がまんざらでもなさそうな顔をした。

(写真 IMG 0948,0949)

ヴァイシャーリーは、仏教の聖地の中でも特にのんびりとしたところである。のどかな農村風景を楽しみながら遺跡公園を訪ね、獅子の頭を戴くアショーカ王の石柱やストゥパと呼ばれる仏塔などを見て回った。仏陀は、入滅の3ヶ月前にこの地で弟子たちに自らの死を予告し最後の旅に出たと伝えられている。

朝6時前にホテルを出発して次の宿泊地ブッダガヤに向かおうとした時、点呼を取っていたシャルマさんが「山本さん、ウイスキー無くなりましたか？」と聞いてきた。私が「静かに飲み干したよ」と答えると、「皆さんはジェントルマンとグッドレディですね！安心しました。それで空いたビンはどこにありますか？」「部屋のごみ箱に捨ててきたよ」「ダメです！ビン見つかったら警察に通報されます！私達、追いかけて逮捕されてしまいます！部屋に戻って、回収してきてください！」フロントで忘れ物をしたと言ってカギを受け取り瓶を回収してからバスに戻った。朝から一騒動あったこともあってか早朝の出立と長時間のバスの移動に誰も不平を言わなかった……。ウイスキーのビンは灌木の茂っている道路わきの溝にシャルマさんが投げ捨てた。バスは30分ほど走るとある小さな村に入った。この村でとんでもない騒動に巻き込まれることになる。

(青空教室の写真 IMG0943)

村には、藁葺きの木と土で造られた家が点在している。家の近くには平たく干し固めた牛糞が山積みになっていて大きい牛が至る所にたむろしている。家と家の間に縄と竹で囲いが施されているところがある。そこで数十人の子供たちが地べたに座って、二人の女性教師から授業を受けていた。地面に直接置かれたノートに手を走らせている子供や先生の話に耳を傾けている子供、囲いの外から見物している私たちに笑顔を向けている子供たち。村の青空教室なのだろう。この村にも親のいない子供たちがいると思われるが、村全体で子供たちが生き抜いていけるように心配りをしているように感じられた。私たちから見ると極めて貧しい村であるが、夜明けとともに村の掃除に取り掛かっている女性たちや家の外で朝餉の準備をしている女性、木の柵の中のわずかな空間に数十人の子供たちを集め、算数や

英語を教えている若い女性教師たち、ヒツジやヤギの乳を縛っている女性たち。青空教室に参加しないで私たちのような観光客に纏わりついて物をねだる子供たち、それらが妙に調和をもって和やかな村の早朝の空気となじんでいるのだ。貧しいが、みんな満ち足りた表情をしている。村人たちの表情はいたって明るい。

「こら！学校へ行って勉強をしなさい」山田先生が物を強請って纏わりついている子供に言い聞かせている。言葉が分からなくてもなんとなく伝わるのだろう。あきれたような顔をして子供が山田先生から離れていった。インドではどの村に行っても何となく“ほっ”とした安心感を覚える。誰も背伸びした生き方をしていない。毎日を水が流れるように暮らしている。

村の中にある遺跡の見学を終えてブッダガヤにある霊鷲山に向かうためバスに戻った。

「皆さん！バスの中から出ないで下さい。」シャルマさんの口調に緊張感が漂っている。バスの周りに村人たちが集まっていてなにやら騒がしい。バスから出て行ったシャルマさんが暫くしてから帰ってきた。「みなさん！ちょっと困ったことが起きました。私たちが先程通ってきたこの村に入る幹線道路でこの村の若者が乗ったバイクがひき逃げに会いました。犯人はまだわかっていません。そのため、村から出ることができなくなっています。すべての道路が村人たちのトラックで塞がれてしまいました。これから村人たちと話し合いますが拘れると何日もここで足止めを食うことになります。皆さんが騒いだりすると村人たちを刺激しこのバスが燃やされてしまうかもしれません。うまく切り抜けますので静かにバスの中で待機しててください。」シャルマさんは、村人のリーダーらしき人達と40分近く話し合っていた。「話がつきました！出発できますが、裏から出ることになります。幹線道路側からは出ることができません。かなり遠回りになります但我慢してください。できるだけ早くここから出なければなりません。」村人たちが道を塞いでいるトラックを人力で動かしている。村人の一人が“ここを通れ”と手招きをしている。「あんな狭いところ通れるかいな！」と木下氏が声を上げた。「静かにしててください！」とシャルマさんが反応する。バスは、左側の木の幹を擦りながら右のトラックのバンパーを軋ませながら通り抜けた。シャルマさんが運転手を急かしている。しばらく走ってから、シャルマさんが説明を始めた。「まさに危機一髪でした！インドの村では、時々あのような騒ぎが起きます。普段、穏やかで何の事件も起きないところですから、一度起きるとすごい騒ぎになってしまうのです。村全体が裁判官になって2日や3日留め置かれることがあります。今日は、運が良かったのです。私の巧みな弁舌もあるのですが、皆さんの日頃の行いが良いからでしょうね。」元のシャルマに戻ったようだ。幹線道路だったら30分ほどで行きつくところを裏から出たため60キロほど離れたところにある橋を渡らなくてはならない。信じられないほどの悪路だ！霊鷲山のふもとに到着するまで6時間以上かかった。

グリッドラクタータ山の麓に着いた。お釈迦様が法華経を説いた霊鷲山と呼ばれる仏教の聖地である。トイレを済ませてから、コンクリートで舗装されている石畳を登り始めた。30～40分ほどで霊鷲山の説法台に到着するはずなのだが…。(写真 IMG0951)

気温35度、風無し、94歳の安中翁の登頂を木下氏や梶さん、森さんたちが手助けしながら休み休み上って行く。心配になったのか井口氏も安中翁を励ましながら手を貸し始めた。およそ1時間20分ほどで説法台に着いた。説法台に座った安中翁が一心に拝んでいる。安中翁の前にはお釈迦様が弟子たちを前にして説法を続けた台座があり、記念碑が置かれている。台座を囲むように多くの国の国旗がはためいていた。心地よい風に吹かれて眼下の景色を楽しんだ。全員で安中翁を気遣いながら麓に戻り、左隣にあるラトナギリ(多宝山)にある日本山妙法寺を目指してロープウェイに乗った。この妙法寺には安中翁が理事長を務める日蓮宗国柱会の僧侶である田中住職が修行中であるとのこと。安中さんの最大の目的が、田中住職と会うことであった。

「残念でしたね、安中さん。」梶さんや近藤さんが慰めている。日本山妙法寺の田中住職

は麓の村にある竹林寺へ出かけていて不在であった。「安中さん！竹林寺に寄ってもらいましょうか？」「いや、もういいよ。これ以上遅くなるとみんなに申し訳ないから…」「遅れついでっていう訳じゃないが、気にすることはないですよ」山田先生が気遣うも、「いや、ホントにいいんだ！縁があればまた会うこともあるから。」安中さんは、かなり疲れているようだ。ロープウェイで下へ降りブッダガヤのホテルに向かった。

お釈迦様が悟りを開いたという菩提樹が残るマハーボディ寺院の近くのホテルで小一時間休息をとってから寺院に向かった。薄暮の中に浮かぶ寺院は眩いばかりのイルミネーションに包まれていた。その光の中を燃えるような朱色の法衣を纏った坊さんの群れが行き交っている。マハーボディ寺院の正門の方に曲がると、その界限には露天、屋台、諸々の商売屋、あるいは路地裏に行くと食べ物屋があって一段と賑やかだ。お釈迦様が覚りを啓かれた寺院の中は、光で満ち溢れていた。菩提樹の下には、僧侶が二人座っていた。その前の庭の中では、欧米人らしき青年が熱心に五体投地を繰り返している。マハーボディ寺院には大塔と呼ばれる高さ52メートルの塔がある。大塔内には金色の仏像が祀られていて、大勢の信者や観光客が黄金の仏像を参拝するため並んでいる。仏像から発する光は、寺院の境内を取り巻いて装飾されたイルミネーションの光を圧倒していた。境内で瞑想にふける多数の僧侶や五体投地を続ける信者達のその姿には時を越えた信仰の力を感じる。

ゆったりとした朝餉を囲み、ホテルを出発したのは午前9時であった。「旅というのはこうでなくっちゃね…」安中さんの声に皆が頷いている。「毎朝4時5時起きはつらいよね」という木下氏に「おまけに目的地まで5時間以上…悪路を走って…」と近藤さんが合わせた。「文句の一つも口にせず、やせ我慢し続けたわが身を褒めてやりたいもんだ！」山田先生の言葉に、すかさず「文句ばかり言ってたじゃない！」と黄色い声が飛んできた。しばらくの間、山田先生と女性達との喧しいやり取りが続いていた。「女房一人でも持て余すのに3人の女を相手にようやるよ」ボソッと近藤さんが呟いた。1時間程走ってスジャータ村に着いた。日本でおなじみのコーヒーの友として知られるミルクのメーカー名は、この村の名に由来しているのだろう。この村の近くにある前正覚山という地で禁欲修行を続けていた仏陀が村の中を流れるニランジャンナ川に沐浴にやってきた。ガリガリに痩せた仏陀の姿を目にした一人の少女がお椀に入ったギー（ヤギの乳で造ったヨーグルト）を差し出した。「私は、修行中なのでそれを口にすることはできない」と拒絶する仏陀に「死んでしまったら修行も、悟りも意味がないでしょう」と言う少女の言葉に仏陀は“ハッ”として自分が考え違いをしていたことに気づいた。との言い伝えで知られる村である。スジャータという名のこの少女が村の名となっている。(村の景色の写真・IMG0956)

スジャータ村を後にした私たちは、パトナ空港へ移動した。3時間ちょっとで空港に着いた。この仏跡ツアー最後の地であるベナレスに空路向かうのだ。ベナレスにあるサールナートは、仏陀生誕の地ルンビニー、仏陀悟りの地ブッダガヤ、仏陀入滅の地クシナガルと並んで初転法輪の地として知られていてこの仏跡ツアーの最後の目的地である。

(ダメクストゥパの写真 IMG0968)

ダメクストゥパという巨大な遺跡が建つサールナートは仏陀が初めて説法をした所と言われている。スジャータ村の近くの前正覚山で苦行し、ブッダガヤで悟りを得た仏陀がベナレスを目指しサールナートに着いた後、かつてともに修行をした 5 人の修行者と出会い、仏陀が悟った真理を初めて語ったと伝えられている。ここで初めて”言葉“になった仏陀の教えが、その後世界へと広がり伝えられていくことになる。サールナートを出て、ガート(死者の家)の近くにあるホテルへ向かう途中で物乞いの子供に出会った。ルンビニで出会った男の子とよく似ていた。濟んだ瞳で見つめてくる。不思議な雰囲気を持った男の子であった。

(物乞いの少年の写真 IMG0964)

明日は、5 時起きである……！

(完)